

## ハイデガー『存在と時間』注解 (4)

寺 邑 昭 信

### 承前

以下に新たに引用した文献とその略号を挙げる。

Dieter Thomä (Hrsg.): Heidegger Handbuch, Metzler 2003 = HH

また『アリストテレスの現象学的解釈』、いわゆる『ナトルプ報告』は、NaBと略記するが、訳については『思想』813号の高田珠樹氏の正確かつ明快な訳を利用させていただいた。頁も邦訳の頁である。なお原文はもともとは1989年の『ディルタイ年報』第六号に掲載されたものであるが、最近ガダマーの序文ともどもレクラム文庫に収録されたので (Universal-Bibliothek Nr.18250) 入手しやすくなった。

またフッサールの『純粹現象学と現象学的哲学のための諸考察』、通称『イデー』についてはこれまでどおり渡邊二郎教授の邦訳『イデー I-I』、『イデー I-II』(みすず書房版) から、邦訳の頁づけで引用させてもらう。

### 注解

・033/16-033/21 「アレーテウエイン、すなわち真理ヲ語ルコトとしてのロゴスの「真であること」とは、それについて語られている存在者を、アポファイネスタイとしてのレゲイン、すなわち語ルコトにおいてその存在者の秘匿性 *Verborgenheit* からとりだして、秘匿されていないもの [アレーテエス] として見させること、つまり 暴露すること *entdecken* である。同様に、「偽であること」を意味するプセウデスタイとは、隠蔽する *verdecken* という意味での欺瞞と同じこと、すなわち或るものを或るもののまえに [見えさせるという仕方で] ですえ置き、かくしてその或るものを、その或るものがそれではない或るものとして言いふらすことである。」

秘匿性、暴露すること、隠蔽するの原語は、それぞれ *Verborgenheit* (接頭

辞 ver と動詞 bergen からなる verbergen 「隠す」という動詞の過去分詞に由来…bergen にはもともと「安全にする」という意味があり、そこから「隠して守る」「埋蔵する」といった意味が派生した) と entdecken (ent は「分離、反対」を意味する接頭辞、decken は「覆う」という意味であり、英語の discover に対応する)、そして verdecken (ver には隠匿、遮断という意味もある) である。岩波版では、Verborgenheit は「隠れていること」と、entdecken は「見つける [覆いを取る・発見する]」、verdecken は「覆うこと [なになにに蓋をすること]」と訳されており、またちくま版では、それぞれ「隠れ」「発見する」「蔽いかくす」である。

ギリシャ語の「真」という名詞、アレーテエスは、もともとは、動詞レートー (ランタノー) に否定辞のアがついた造語に遡る。ランタノーは escape his notice, make one forget といった意味である。また名詞レーテーは、忘却、そして冥界の「忘れの川」を意味する。(ちなみに元素名ランタニウムは、このギリシャ語に由来する。) そこでアレーテエスには、もともと unconcealed な状態という意味があったわけであるが、普通は、「真理」 truth の意味で使用されている。またプセウデスタイは、「欺く、うそを言う」が原義である。

ハイデガーは、このアレーテエスの原義に遡り、本来、「真理」とは、観念と対象が「合致」することを指すのではなく、何かを暴露すること、あらわに見えさせることであり、それはまた同時に隠蔽と表裏一体であるという独自の真理観を展開するのだが、ここでは、それがまずは形式的に簡単に述べられているのである。

また判断における「合致」としての真理観を派生的なものと断定する考えにも、主観-客観図式に根ざす伝統的真理概念を解体しようとするハイデガーの意図が確認できよう。例えば「さらにわれわれは、真理と偽について、まるで魂の内部の諸表象が外部の存在者を模倣する点に真理が成立するかのよう、模写説の意味での真理論をアリストテレスが主張したと考えることは、先入見なのであると述べた。」(GA21/162, また NaB25頁も) 参照。(ただし、

これはあくまでハイデガーのアリストテレス解釈であることに注意。たとえば「アリストテレスは感覚 (aisthesis)あるいは感覚能力(to aisthetikon)を、このように簡明的確に、「感覚対象の形相を質料なしに受容する能力」(to dektikon ton aistheton eidon aneu tes hyles)と規定している。これは、感覚についてに限らず一般に認識と認識対象との関係にも適用されるもので、アリストテレスの模写説とも反映論とも言われるものの原型として注目される。」(出隆：『アリストテレス哲学入門』岩波書店1972年、250頁以下)を参照のこと。

なお全集第20巻のロゴスの意味規定の箇所では、この真理＝暴露すること、露わなことという考えは登場しないが、全集第21巻では131頁以下が扱っている。

またこのハイデガーの真理観については、『存在と時間』第44節「[現存在、開示性、および真理]」で詳述されることとなる。

・033/29-033/32 「ギリシャ的な意味において、しかも前記のロゴスよりもいっそう根源的に「真」であるのは、アイステーシス、すなわち感覚である、つまり、或るものを、率直に、感性的に認知すること Vernehmen である。アイステーシス、すなわち感覚というものがそのつどめざすのは、おのれのイデア、すなわちおのれの特定対象であり、つまり、まさしくそのアイステーシスをつうじて、またそのアイステーシスにとつてのみ、そのつど純正に近づきうる存在者である。」

ここの文章は、アリストテレスの『靈魂論』の感覚論の説明を踏まえたものである。ハイデガーは、全集第17巻で、アリストテレスに即して「現象」概念を明らかにする際に、アリストテレスの『靈魂論』の第二巻第六章を中心的に取り上げるのだが、そこでは、感覚についてのアリストテレスの発言が、次のようにまとめられている。

「アイステータ [感覚されるもの] には三種類ある：1. イデア 2. コイナ 3. シュムベベーコタである。

イデオン [固有なもの] とは、知覚の特定の仕方によってしかもその仕

方だけによって近づきうるようになるものである。それは、アエイ・アレーテエス [いつでも真である] という性格をもっている。視覚は、それがあるかぎり、いつも色だけを暴一露するのである；聴覚はいつも音だけをである。2. コイノン。知覚の或る特定の仕方にだけに仕立てられているのではない存在性格がある。例えばキネーシス [運動]。3. シュムベベーコタ [付帯するもの] は、通例知覚されたものである…。なぜなら通例私は色を見ているのでも音を聞いているのでもなく、むしろ女性歌手の歌を、つまり最も近い知覚作用においてともに出会われているものを聞くのである。カタ・シュムベベーコス [付帯的にあるもの] の知覚可能性に関しては、思い違いはあり得るし、通例でさえある。」(GA17/08f.)

ロゴスよりも感覚が一層根源的に真であるといわれる場合、この感覚はアリストテレスの分類の中の最初のもの、イディア (これはイディオス [私的な、個人的な、独特の、固有の] に由来し、特質という意味であり、イデアと混同しないように注意。cf. 英語の idiosyncrasy, idiot 等)、つまりそれぞれの感覚作用の領分であるものを対象とする感覚(能力)である。この感覚は、ロゴス介入以前の働きであるから、「として構造」を欠いているため、ただ暴露するだけであり隠蔽することができない (見ることは色を露わとする働きであり、色を隠すことはできないし、聞くことは音を聞くことであり、音を遮ることはできない)。それゆえそれ自身の機能としては誤り得ない (欺きはありえない)。そこで「一層根源的に真」であるのは第一種の感覚というわけである。

なお普通感覚は欺きやすいといわれるが (cf. 「人間どもにとって眼や耳は悪しき証人である。」ヘラクレイトスの断片 DK.22B107)、感覚による誤りは、何かの色、何かの音というように何かへの関係づけにおいて初めて生じる事態だというのである。「アイステーシスやノエーシスのファンタシアとの諸連関に基づいて、虚偽や欺きが生まれるのである。このアイステーシスは、そうしたものとしては、何かを他の何かから際立たせることである (区別すること)。」(GA17/26) (あるいは「ロゴスは、知覚が自然な仕方でアイステー

シス・カタ・シュムベベーコスとして動いているときには、いよいよ生きているのである。」(GA17/28)参照。

ちなみにアリストテレスの原文に即した邦訳は、次のようになっている。

「さて、それぞれの感覚に関しては、まず第一に、感覚されるものについて論じなければならない。「感覚されるもの」は三通りの意味で語られるが、そのうちの二つは「それ自体として感覚される」のであり、もう一つは「付帯的に感覚される」とわれわれは主張する。また最初の二つ[それ自体として感覚されるもの]のうち、一方はそれぞれの感覚に「固有のもの」であり、もう一方はすべての感覚に「共通するもの」である。

私がそれぞれの感覚に「固有なもの」と言うのは、他の感覚によっては感覚することが不可能であり、またそれについて誤ることも不可能であるものである。たとえば、視覚が色を、聴覚が音を、味覚が味を対象とする場合がそれに当たる。…しかし少なくともそれぞれの感覚は、これら対象について判別し、色ということ、音ということに関するかぎりでは誤ることはないものであり、それらが誤るのは、色づけられたものが何であるか、あるいはどこにあるのか、音を発するものが何であるか、あるいはどこにあるかということについてである。そこで先に述べられたような対象が、それぞれの感覚に「固有のもの」であると言われるのである。これに対して「共通のもの」と言われるのは動と静止、数、形、大きさである。なぜならそうした対象はいかなる感覚にも固有のものではなく、すべての感覚に共通するものだからである。実際、触覚にとってある種の動は感覚されるものであり、また視覚にとってもそうである。」(『靈魂論』418a6 sqq. 訳文は中畑正志訳『アリストテレス 魂について』京都大学出版会による。この翻訳の208頁以下にはアイステーシスの訳語についての訳者による丁寧な解説がある。)

・033/35-033/41 「最も純粋な最も根源的な意味において「真」であるのは一言いかえれば、暴露するだけであって、したがってけっして隠蔽することができないのは、純粋なノエイン、すなわち思考することであり、つまり、存在者そのものの最も単純な諸存在規定を、率直に眺めやりつつ認知するこ

とである。このノエインは、決して隠蔽することはできず、けっして偽であることはできず、たかだかそれは、認知しないこと、すなわちアグノエイン、つまり率直に適切に近づく通路を欠くことにとどまりうるだけである。」

ノエインは、「見る、分かる、思考する、熟考する、見なす、企てる」などの意味を持ち、その派生語ノエーマ（思考されたもの）には「考え、思惟、意図」などの意味が、またノエーシス（思考する作用）には「理解力、理性、知性」などの意味がある。

前掲の出隆著『アリストテレス哲学入門』に所収の思考能力についてのアリストテレスの発言（『靈魂論』429a10-29）に付した著者の注では、次のように述べられている。「『思惟する』と訳される原語 'noein' は、知る、考える、判断する、推理するなどの意に用いられるが、ドイツ語の Vernunft（理性）が vernehmen（聴く）と関係ある語であるように、この 'noein' はもともと「見る」の意味をもち、そしてこの動詞やその名詞形 noesis（思惟）と親近な「理性」の原語 'nous' もその意味する「思惟する者」「思考能力」の奥底には「見る者」「見る能力」の意がある。ここから、アリストテレスではその 'nous' が同じく見る的な 'theoria' と容易に直結されえたのである。」（同書254頁）この直観と理性の結びつきについては、またプラトンの『国家』510以下を参照のこと。その中でプラトンは、理性に関して、ノエーシス「〈知性的思惟〉（直接知）」とディアノイア「〈悟性的思考〉（間接知）」を区別している。一般にディアノイアが、数学の証明のように仮説から結論へと向かう整然とした思考を指すのに対し、ノエーシス、つまり「直観的理性は諸々の真理を一挙に把える。それは細かい証明の過程を踏む必要もなく直接的に《本質》を覚知する。」（G.グランジェ：『理性』文庫クセジュ211、13頁以下）という。

そこで、規定する働きをもつディアノエインとしてのノエインではなく、純粹なノエインは、いわば知的直観として、事物のありのままの姿、あるいはアイデアを間違えなく眺め捉える（ことしかできない）から、ここにも隠蔽の可能性の条件である総合の構造、ロゴス構造が欠けており、したがって隠

蔽、偽は最初からそれ自身においてありえないのである。そこで真理の反対概念を持たない純粋なノエインには、ノエインを止めること、つまりアグノエイン（「感知しない、見のがす、無知である」、その名詞形がアグノイア、すなわち「無知」である）するという選択肢しかもたないのである。また感覚が、ファンタシアと関係することによって、隠蔽、欺きという可能性をもつものに対して、純粋なノエインは後にも先にもそうした可能性を持たないがゆえに「最も純粋な最も根源的な意味で真」なわけである。（ただし、その場合、現象の側が、真におのれ自身に即しておのれを示していることの保証については問題が残るのであろう。）

ハイデガー自身は、例えば『ナトルプ報告』の中のアリストテレス『ニコマコス倫理学』第六巻の解釈において、アリストテレスの純粋な直覚としてのヌース、ノエインは、「端的に直覚そのものであり」「一定の方向において[何か]と何らかの仕方に関わり合う上で、その関わり合いの「向かう先」[志向的な対象]をそもそも可能ならしめ、あらかじめそこに与えてくれるもの」(NaB27頁)、「裁量しうることとして、あたかも光のようにすべてを作る」(NaB28頁)働き、「そもそも視界を、ひとつの何かを、ひとつの「現にそこ」を与える (ibid.)」働き、あるいは何かに関わることを可能にする「関わり合いの照明」「存在真実化」(ibid.)の働きと解釈している。そしてこのヌースの本来の対象は、「ヌースが、語り無しに、つまり何かに向かってその「何々としての諸規定に向かって言明するという仕方を経ずに…直覚するもの、分割し得ぬもの、それ自身において分解することができずそれ以上解明できぬものである」(ibid.) ため、その場合のヌースは「対象となるものを純粋にそれ自身としてその包み隠されぬ「何」において与え、そのかぎりでも「もっぱら真であり」、誤る可能性がまだないという。このヌースの現勢態における具体的に遂行形態の中の主要なものが「知恵（注視する本来的な理解）」と「思慮（顧慮する目配り）」(NaB29頁) であるという。

また全集第21巻の以下のような該当箇所（アリストテレス『形而上学』 $\theta$ 巻第10章の解釈の箇所）も参照のこと。

